

土地分類基本調査

「有峰湖」「槍ヶ岳」

5 万分の 1

国 土 調 査

岐 阜 県

2 0 0 1

序 文

この調査は、国土調査法に基づき国土の開発及び保全並びにその利用の高度化に資するために、国土の実態を科学的かつ総合的に調査したものです。

本県は、昭和57年度からこの調査を実施し、40の調査対象図幅のうち既に28図幅について印刷を完了しています。本書は、平成10年度から平成12年度にかけて調査した5万分の1地形図「有峰湖」、「槍ヶ岳」について、「有峰湖」、「槍ヶ岳」図幅として取りまとめたものです。

この調査の実施にあたって協力いただいた関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、この成果が今後、県土の秩序ある発展を図るための企画・立案の基礎資料として広く活用されることを希望します。

平成14年3月

岐阜県地域計画局長 藤森 祥弘

ま え が き

1. 本調査は、岐阜県が国土交通省土地・水資源局国土調査課の指導を得て、実施したものです。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の3の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿です。
3. 本調査の実施及び成果の作成機関並びに担当者は、下記のとおりです。

記

| | | | |
|--------------|---------------|-------|-------|
| 総括 | 岐阜県地域計画局土地対策室 | | |
| 地形分類調査 | 岐阜大学教育学部 | 名誉教授 | 関根 清 |
| 表層地質調査 | 〃 | 教授 | 小井土由光 |
| 土地利用 現況調査 | 岐阜大学農学部 | 助教授 | 木村 正信 |
| 土壌調査 | 岐阜県農業技術研究所 | 環境部長 | 平 正博 |
| | 岐阜県森林科学研究所 | 研究員 | 渡邊 仁志 |
| | 〃 | 部長研究員 | 中川 一 |
| | 〃 | 主任研究員 | 井川原弘一 |
| | 〃 | 研究員 | 大洞 智宏 |

目 次

総 論

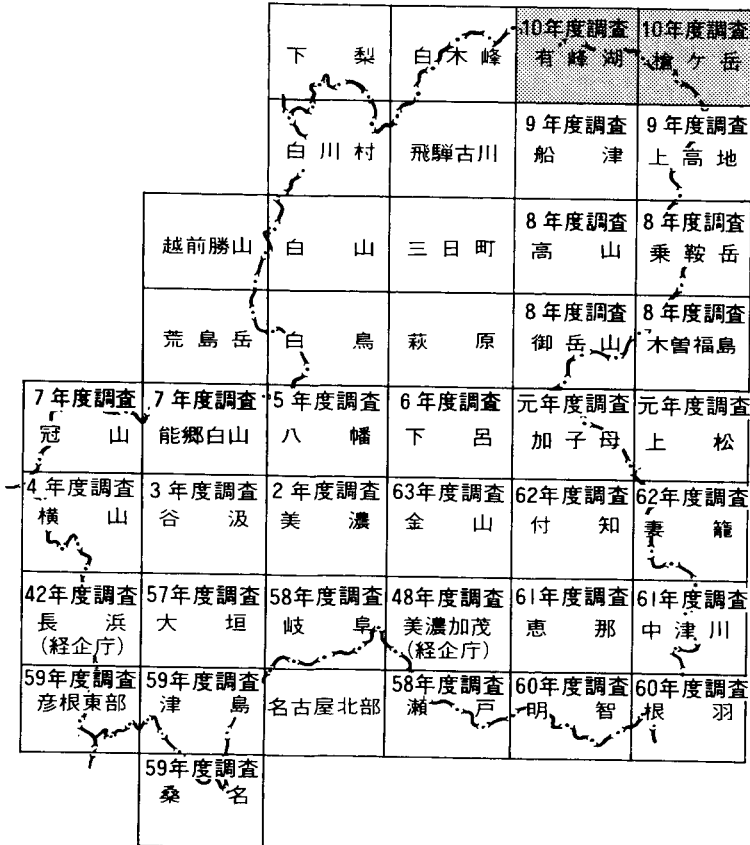
| | |
|------------|---|
| I 位置及び行政区画 | 1 |
| II 人 口 | 2 |
| III 産 業 | 4 |

各 論

| | |
|------------|----|
| I 地 形 分 類 | 9 |
| II 表 層 地 質 | 14 |
| III 土 壤 | 20 |
| IV 土地利用現況 | 32 |

位置図

年度調査



総

論

I 位置及び行政区画

1. 位置

この調査の対象地域は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「有峰湖」、「槍ヶ岳」図幅である。

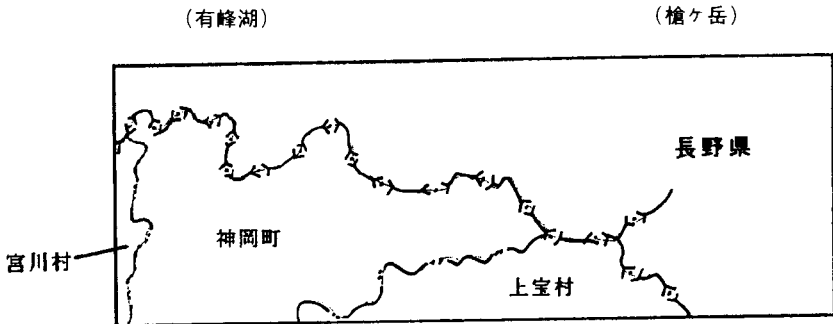
経緯度は、東経 $137^{\circ} 15'$ ～ $137^{\circ} 45'$ 、北緯 $36^{\circ} 20'$ ～ $36^{\circ} 30'$ の範囲である。

2. 行政区画

本図幅の行政区画は、宮川村、神岡町、上宝村の3町村であり、それぞれの行政区域の一部からなっている。

(図—1 参照)

図—1 行政区画図



Ⅱ 人 口

調査区域にかかる3町村の人口は16,757人（平成12年国勢調査結果）で、県人口の0.8%を占めている。

これらの町村では、昭和60年から平成12年までに4,126人減少している。

県全体で3.9%増加しているのに対し、△19.8%と、この地域全体では大幅な減少となっている。

表一1 人口

| 行政区分 | 昭和60年 | | 平成2年 | | 平成7年 | |
|------|-----------|------------|-----------|------------|-----------|------------|
| | 人口 (人) | 世帯数 (戸) | 人口 (人) | 世帯数 (戸) | 人口 (人) | 世帯数 (戸) |
| 宮川村 | 1,616 | 520 | 1,310 | 390 | 1,229 | 357 |
| 神岡町 | 14,937 | 4,561 | 13,581 | 4,245 | 12,533 | 4,087 |
| 上宝村 | 4,330 | 1,207 | 4,186 | 1,285 | 4,083 | 1,275 |
| 計 | 20,883 | 6,288 | 19,077 | 5,920 | 17,845 | 5,719 |
| 県計 | 2,028,536 | 567,946 | 2,066,569 | 601,015 | 2,100,315 | 643,531 |

特に宮川村では、昭和60年から平成12年までに27%、神岡町では23%と4
 程度の人口が減少している。 (表-1)

| 平成12年 | | 人口増減(人) | | | 人口増減率(%) | | |
|-----------|------------|---------|---------|---------|----------|-------|-------|
| 人口 (人) | 世帯数 (戸) | 60~2年 | 2~7年 | 7~12年 | 60~2年 | 2~7年 | 7~12年 |
| 1,178 | 392 | △ 306 | △ 81 | △ 51 | △ 18.9 | △ 6.2 | △ 4.1 |
| 11,568 | 4,030 | △ 1,356 | △ 1,048 | △ 965 | △ 9.1 | △ 7.7 | △ 7.7 |
| 4,011 | 1,360 | △ 144 | △ 103 | △ 72 | △ 3.3 | △ 2.5 | △ 1.8 |
| 16,757 | 5,782 | △ 1,806 | △ 1,232 | △ 1,088 | △ 8.6 | △ 6.5 | △ 6.1 |
| 2,107,687 | 680,171 | 38,033 | 33,746 | 7,372 | 1.9 | 1.6 | 0.4 |

資料 国勢調査結果による。

Ⅲ 産 業

1 農林業

地域内の町村の総農家数は1,338戸で、これは県下総農家数の1.6%にあたり、専業農家の割合は県平均の5.8%と同程度の5.5%となっている。また、経営耕地面積は965haで、県下総経営耕地面積の1.6%を占め、農業粗生産額は県下全体の1.6%となっている。

この地域は高冷地野菜の主要な生産地であり、農業粗生産額の生産種別構成を県下全体と比較すると、米及び畜産がやや低く野菜が高くなっている。農業粗生産額の構成比から見ると、トマト、だいこん、はくさいを中心とした野菜の構成比が5割程度と高くなっている。

畜産については、鶏及び豚の家畜飼養戸数がほとんどなく、乳用牛、肉用牛で構成されている。また、飼料作物である牧草等の収穫量も比較的多い。

(表-2)

表-2 農業の概要

| 行政区 区域 | 農 家 数 | | | | 経営耕 地面積 (ha) | 農業粗生産額 (百万円) | | | | |
|-----------|------------|-----------|-----------|------------|--------------------|--------------|--------|--------|--------|--------|
| | 総 数 (戸) | 専業 (戸) | 兼業 (戸) | 専業率 (%) | | 総 額 | 米 | 野菜 | 畜産 | その他 |
| 宮川村 | 226 | 21 | 205 | 9.3 | 144 | 318 | 50 | 155 | 96 | 17 |
| 神岡町 | 603 | 30 | 573 | 5.0 | 486 | 746 | 224 | 371 | 126 | 25 |
| 上宝村 | 509 | 23 | 486 | 4.5 | 335 | 654 | 201 | 308 | 80 | 65 |
| 計 | 1,338 | 74 | 1,264 | 5.5 | 965 | 1,718 | 475 | 834 | 302 | 107 |
| 県 計 | 84,764 | 4,919 | 79,845 | 5.8 | 60,600 | 129,024 | 32,106 | 34,376 | 42,449 | 20,093 |

資料 岐阜県農林水産統計年報(平成11~12年)による。(農家数は、「2000年世界農林業センサス」結果により、兼業農家には、自給的農家を含んでいる。)

林業については、地域内の市町村の林野面積が94,264haで、県下総林野面積の10.9%を占めている。

また、民有林の比率は59.7%で、県平均の79.1%に比べ低くなっている。民有林のうち人工林の比率は、県平均の44.6%を下回っている。（表-3）

表-3 林業の概要

| 区分 行政 区域 | 林 野 面 積 (ha) | | | | 林 家 数 (戸) |
|----------------|--------------|---------|--------|---------|--------------|
| | 総 数 | 国 有 林 | 公 有 林 | 私 有 林 | |
| 宮 川 村 | 19,193 | 4,803 | 732 | 13,658 | 290 |
| 神 岡 町 | 29,622 | 7,598 | 3,112 | 18,912 | 1,186 |
| 上 宝 村 | 45,449 | 25,560 | 574 | 19,315 | 702 |
| 計 | 94,264 | 37,961 | 4,418 | 51,885 | 2,178 |
| 県 計 | 867,085 | 181,532 | 74,221 | 611,333 | 64,075 |

資料 平成10年度岐阜県林業統計書による。(林家数は、「1990世界農林業センサス・林業事業体調査」の結果による。)

2 工 業

この地域の事業所数は、県全体の0.5%にあたる105事業所、従業員数は1,770人で、県全体の0.7%となっている。また年間製造品出荷額は338億円で、県全体の0.7%となっている。

この地域の1事業所あたりの平均従業員数は16.9人で、県平均の11.3人を5割程度上回っているが、比較的規模の小さい事業所が多い。また、従業員1人あたりの年間製造品出荷額等は1,911万円で、県平均の2,075万円を8分程度下回っている。

(表—4)

表—4 工業の概要

| 区分 行政区域 | 事業所数 | | | | 従業者数(人) | | | 年間製造品 出荷額等 (百万円) |
|------------|--------|-------|------------------|--------|---------|---------------|----------------------|------------------------|
| | 総数 | 会社 | 組合 その他の 法人 | 個人 | 総数 | 常 労働 用者 | 個人事業 主及び家 族従業員 | |
| 宮川村 | 4 | 3 | — | 1 | 49 | × | × | 537 |
| 神岡町 | 84 | 43 | 2 | 39 | 1,546 | × | × | 31,679 |
| 上宝村 | 17 | 12 | 1 | 4 | 175 | 171 | 4 | 1,603 |
| 計 | 105 | 58 | 3 | 44 | 1,770 | | | 33,819 |
| 県計 | 21,292 | 8,700 | 162 | 12,430 | 239,613 | 220,521 | 19,092 | 4,972,340 |

資料 平成11年工業統計調査結果による。

3 商 業

商店数は309店舗で、県下総商店数の0.9%、年間販売額は173億円で、県全体の0.3%となっている。商店のうち卸売業の占める割合は6.5%で、県平均の22.9%を下回っている。

従業員1人あたりの年間販売額は1,721万円で、県平均の3,327万円を下回っており、宮川村では約2割となっている。 (表-5)

表-5 商業の概要

| 行政 区域 | 商 店 数 | | | 従業者数 (人) | 年間販売額 (百万円) |
|----------|--------|-------|--------|-------------|----------------|
| | 総 数 | 卸売業 | 小売業 | | |
| 宮 川 村 | 19 | — | 19 | 50 | 298 |
| 神 岡 町 | 221 | 14 | 207 | 700 | 12,630 |
| 上 宝 村 | 69 | 6 | 63 | 257 | 4,405 |
| 計 | 309 | 20 | 289 | 10,007 | 17,333 |
| 県 計 | 33,610 | 7,683 | 25,927 | 184,690 | 6,143,871 |

資料 平成9年商業統計調査結果による。(代理商・仲立業を除く。)

各 論

I 地形分類

1 地形概説

日本列島はユーラシア大陸の縁辺部に位置し、プレート論的観点からは太平洋プレート・フィリピンプレートとアジアプレートの会合部に位置する弧状列島からなっている。このようなプレートとプレートとの会合部に特有の地殻運動の特徴を反映して、東北地方から中部地方を経て近畿地方北部に至る地域では、応力場的にはほぼ東西の最大圧縮応力場を形成し、これを反映して南北方向に軸をもつ曲隆と曲降運動による大地形が規則的に配列・分布している。この大地形を骨格として、中・小地形がこれに付随する形で、分布するという特徴をしめしている。それ故、個々の山地の尾根や河谷などの地形にも、その配列や分布に規則性が認められる。これらの曲隆・曲降運動の波長は、約70～100kmのひろがりをもっている。

中部地方のような東西圧縮応力場の環境下では、曲隆・曲降運動の進展に伴って、その傾斜の変換点区域には帯状に応力が集中し、歪みの蓄積のために逆断層が多発し、曲隆部の地塊を一層隆起させ、断層山地が形成される。それ故に、曲隆部と曲降部との境には南北方向の逆断層が認められる場合が多い。当然のことながら、これらの逆断層と共役関係にある副断層が、これにはほぼ直交・斜交状に発生している場合も多い。

また、このような応力場に急激な圧縮応力が加わる環境下では、応力軸に斜交する剪断応力性の断層と考えられる横ずれ断層が多発するようになる。このために、中部地方においては、北東～南西、北西～南東方向のA級活動度の横ずれ逆断層も卓越している。

以上のように、地殻運動の特徴を反映させて、中部地方における断層運動は、大局的には南北方向、東西方向、北東～南西方向、北西～南東方向への断層系として捉えることができる。上述した曲隆・曲降性の大地形は、これらの断層運動の運動形態を反映させて山脈状・山塊状の山地や舟窪状・盆地状の低地に細分されている。

日本アルプスの東縁に位置する糸魚川―静岡線以西の中部地方から中国地

方にかけての地域は、藤田（1980）が指摘しているように、東高西低の曲隆と曲降運動を繰り返した傾動地塊からなるといわれている。本図幅の地域は、このうちの富山平野から伊勢湾に至る曲降性の地域内に位置する山地、飛驒山地（飛驒高原）の東部から曲隆性の飛驒山脈（北アルプス）の南西端部に位置している。富山平野から伊勢湾に至るこの曲降性の地域内に位置する山地は、全体的には北高南低の定高性の壮年期山地を形成しながら、飛驒山地（飛驒高原）・美濃山地（美濃高原）・三河山地（三河高原）を経て、伊勢湾に至るという地形環境下にある。飛驒山地は、南の位山分水嶺山地（本図幅外）より北側に位置する山地を北飛驒山地と呼び、位山分水嶺山地より南側の南飛驒に位置する山地が阿寺山地に細分され、その南が美濃山地、そして屏風山断層崖を境に三河山地へと連続している。

飛驒山地は、標高1000m～1500mに定高性の頂稜部が広く分布する中山性山地からなり、古くから標高1000m、1300m、1500m付近に、3段からなる侵蝕平坦面が存在するといわれてきた。これらの侵蝕面を連ねた地形面が、前輪廻の隆起準平原面である。これを反映させて、飛驒山地は東・西両側に位置する飛驒山脈・両白山地に比べて、穏やかな早壮年期の地形景観を呈している。

本図幅には飛驒川水系と黒部川水系及び高瀬川水系の源流域の山地、飛驒山地の深奥部の山地が位置している。この地域の山稜部の地形は、地質条件を反映させた組織地形からなり、緻密で堅硬な火山岩類、ホルンフェルスや細粒深成岩類からなる山稜部は急峻な尖峰群の山稜を形成し、マサ化しやすい深成岩類や節理密度の高い手取層群からなる山稜部はなだらかな地形から成り立っている。

本図幅の山稜や河谷は、上述したように、中部地方の地殻運動や断層運動の特徴を反映して、全体的には北西～南東、北東～南西、南～北及び東～西方向に配列・連続する特徴を有している。中部地方の断層運動には、北西～南東、北東～南西方向の横ズレ変位の断層が卓越していて、北東～南西方向の断層は手取層の山地でよくみられ、断層の北西側が南東側に対して上昇する変位を示している。北東～南西方向の断層の一つが、本図幅の地形にも影響を与えている右横ズレ逆断層の跡津川断層に代表される断層である。これ

らの横ズレ断層は、地震災害的には、危険度がA級の活断層である。従って、本図幅内には活断層起因の断層地形やこれに類似する断層地形及び活断層を推定させる地形的リニアメントが卓越している。

ここで扱う台地は、河谷沿いに発達している第四紀、更新世中・後期の河岸段丘の地形からなる台地である。本図幅には、神通川水系の内の高原川の河岸段丘が位置している。高原川の河岸段丘は、段丘を覆う火山灰層の年代、段丘堆積物の特徴、段丘面の高度やその連続性などに着目して、上位から「本郷段丘(約5万年前)」・「宮原段丘(約4.7万年前)」・「中越段丘(約1.1万年前)」・「殿段丘(約0.9万年前)」・「坂巻段丘(約0.5万年前)」・「見座段丘(約0.23万年前)」の6段の段丘群に区分されている。

ここでは、便宜的に、本郷段丘と宮原段丘を「上位段丘(Uh段丘)」、中越段丘を「中位段丘(Um段丘)」、殿段丘・坂巻段丘・見座段丘を「下位段丘(U1段丘)」に再区分し、更に、便宜的に「上位段丘」とした「本郷段丘」を「Uh1段丘」、「宮原段丘」を「Uh2段丘」とし、「中位段丘」とした「中越段丘」を「Um1段丘」とした。また、「下位段丘」とした「殿段丘」を「U12段丘」とし、「坂巻段丘」を「U13段丘」、そして「見座段丘」を「U14段丘」とした。

2 山地

日本アルプスから中国地方東部にかけての地域は、大局的には曲隆・曲降運動が交互に連続する地盤運動からなる地域であり、地形もこれらの地盤運動や地質構造の影響を受けている。本図幅の山地は、富山湾～伊勢湾に至る曲降部の東部から、曲隆部にあたる日本アルプス・飛騨山脈(北アルプス)の南端部に位置する槍・穂高連峰～焼岳山塊～乗鞍山塊にあたる山地の一部である。

飛騨山地は、本図幅の南に隣接する位山分水嶺山地を挟んで、北側が北飛騨山地、南側が阿寺山地と美濃山地に細分されている。中部地方の断層運動の特徴を反映して、山地の地塊化は進行し、山稜線の方角や山地内の河谷の流向は、全体的には北西～南東、北東～南西及び南～北方向が卓越する分布的特徴を有する。このために、本図幅内の山地を、これらの河谷によって区

分し、小山塊に細分することとした。

本図幅の山地を、ここでは、便宜的に、飛驒山脈（I a）、飛驒山地（I b）に細分した。

(1) 飛驒山脈（I a）

飛驒山脈は、日本アルプスのうちの「北アルプス」と呼ばれている山脈であるが、この北アルプスは、ヨーロッパアルプスなる地名に由来している。アルプスという呼び名は「雪を被った高山」という意味のようである。そして、森林限界より高く、過去の氷河地形の跡を留める、裸岩の尖峰群からなる峰々と急斜面、不協和合流（飛瀑を造って合流）する支流をもつ深い溪谷などが、日本アルプス、とりわけ「北アルプス」の自然景観といえる。まさに、西南日本内帯の山地では最も高峻な山岳地帯をなす満壮年期の山地である。飛驒山脈の北部は、黒部川の谷を挟んで西には立山連峰、東に後立山連峰の主嶺が連なり、南部の槍・穂高連峰へと至る。

山脈を構成する岩石は、主として花崗岩類と古生界の地層からなるが、一部には中生界や流紋岩なども分布している。飛驒山脈の東側は、急崖や急斜面からなり、西側は比較的緩やかに低下して形態的には傾動地塊状を呈している。

本図幅には、日本アルプスの中でも、最もヨーロッパアルプス的な山地景観を維持している槍・穂高連峰の北部山地と三俣蓮華岳山塊から黒部五郎岳・北の俣岳に至る北アルプスでも最も深奥部の山地が位置している。

(2) 飛驒山地（I b）

飛驒山地は、上述したように、飛驒山脈の西方に位置し、岐阜県の北部に広がる山地であり、飛驒高原・飛驒高地とも呼ばれている。定高性の頂縁部が広く分布する中山性山地からなり、古くから標高1000m、1300m、1500m付近に、3段の侵蝕平坦面をもつ前輪廻の隆起準平原面であるといわれてきた。これを反映させて、飛驒山地は東・西両側に位置する曲隆性の山地、飛驒山脈・両白山地に比べて、穏やかな早壮年期の地形景観を呈している。

山地を構成する岩石は、片麻岩、石英斑岩を主とし、古生界・中生界の堆積岩も分布している。特に、この地域の片麻岩は飛驒変成岩類に属するもので、日本列島の基本的構造をなす飛驒帯を形成している。

3 台地

上述したように、ここで扱う台地は、神通川水系の高原川と宮川河谷沿いに発達している第四期、更新世中・後期の河岸段丘地形からなる台地である。本図幅には、高原川水系のみの河岸段丘が位置している。このうち高原川河谷の河岸段丘は、上位から「本郷段丘(約5万年前)」・「宮原段丘(約4.7万年前)」・「中越段丘(約1.1万年前)」・「殿段丘(約0.9万年前)」・「坂巻段丘(約0.5万年前)」・「見座段丘(約0.23万年前)」の6段の段丘群に区分されている。

ここでは、これらの段丘群を段丘の形成年代、段丘面高度とその連続性などをふまえて、

便宜的に本郷段丘と宮原段丘を「上位段丘」、中越段丘を「中位段丘」、殿段丘・坂巻段丘・見座段丘を「下位段丘」に再区分した。そして、更に「上位段丘(Uh段丘)」とした「本郷段丘」を「Uh1段丘」、「宮原段丘」を「Uh2段丘」とし、「中位段丘(Um段丘)」とした「中越段丘」を「Um1段丘」とした。また、「下位段丘(Ul段丘)」とした「殿段丘」を「Ul2段丘」とし、「坂巻段丘」を「Ul3段丘」、そして「見座段丘」を「Ul4段丘」とした。

ここでは、便宜的に、高原川河岸段丘台地(Ⅱa)、宮川河岸段丘台地(Ⅱb)と小八賀川河岸段丘台地(Ⅱc)に区分したが、本図幅には高原川河岸段丘台地のみが位置している。

(1) 高原川河岸段丘台地(Ⅱa)

本図幅におけるこの台地は、地域的には、高原川上・中流部の河谷沿いと、その支流の河谷沿いに分布する「上位段丘」(Uh段丘)、「中位段丘(Um段丘)」および、「下位段丘」(Ul段丘)中の、「Ul2段丘」・「Ul3段丘」・「Ul4段丘」の3段の河岸段丘からなる砂礫台地である。

Ⅱ 表層地質

1 表層地質概説

本図幅地域は、日本列島の骨格をなす代表的な地質構造区分帯のうち、日本列島最古の岩石類が分布する「飛騨帯」にあたり、その外側を带状に取り囲む「飛騨外縁帯」にあたる地域もわずかにかかっている。ただし、それぞれの地質帯はおもに花崗岩質岩石に広く貫かれるため、実際には断片的に分布するにすぎない。

「飛騨帯」はおもに変成岩にあたる片麻岩類で構成され、それらには古生代以前の先カンブリア時代にまでさかのぼる形成年代を示すものも含まれる。「飛騨外縁帯」はおもに古生代前～中期にわたるいろいろな時期に形成された極めて複雑な地質構成要素からなる地帯であるが、本地域では東端部とその西方にあたる地域に結晶片岩としてだけ分布するが、後者の帰属についてははっきりしていない。飛騨帯および飛騨外縁帯を構成する岩石類を広く貫く花崗岩質岩石が「船津花崗岩類」であり、中生代ジュラ紀初期にあたる約1億8000万年前ごろを中心に形成され、本地域のかなり広い範囲にわたって分布する。

飛騨帯、飛騨外縁帯、船津花崗岩類を覆って、本図幅地域のおもに北部地域にジュラ紀後期～白亜紀前期に形成された「手取層群」が分布する。手取層群の上に飛騨帯の片麻岩類や船津花崗岩類が「横山衝上断層」でのりあげており、手取層群の形成後かなり激しい運動があったことを物語っている。また、東端部では、後期白亜紀～古第三紀に激しい火山活動によって形成された「笠ヶ岳流紋岩類」が船津花崗岩類を覆っており、ほぼ同時期に形成された花崗斑岩や花崗岩には貫かれている。

これらよりもさらに若い新第三紀末期から第四紀にかけての時期には、東端部の県境付近に流紋岩質岩石からなる「奥飛騨火砕流堆積物」や安山岩質岩石からなる「穂高安山岩類」が形成され、後者を貫く「滝谷花崗閃緑岩」も分布する。

2 地表地質細説

(1) 未固結堆積物

a) 礫がち堆積物(g1)

本図幅地域で比較的規模の大きい河川である高原川は深い峡谷をなして流れているため、沖積層にあたる本堆積物は分布しない。支流の打保谷川沿いにだけ分布し、山間部における数少ない耕作地や宅地に利用されている。

b) 礫がち堆積物(g2)

比較的規模の大きい河川においてはおもに段丘堆積物、それらの支流・支谷においてはおもに崩積堆積物である。前者では亜円礫～円礫から、後者では亜角礫～亜円礫からそれぞれなり、場所によっては両者の区別が明瞭につかない場合もある。また、東部の標高の高い県境付近では、氷河堆積物あるいは周氷河堆積物、土石流堆積物がみられる。

(2) 固結堆積物

a) 泥質岩(sh)

北東縁部の県境をなす北ノ俣岳周辺にだけ分布する。手取層群に属するものであり、泥岩およびシルト岩からなる。接触変成作用を受けており、赤みがかかった灰色～濃灰緑色を呈する。

b) 砂岩(ss)

手取層群分布域内をおおよそ東西方向に帯状に広がって分布する。東端部にもわずかな分布がみられる。おもに粗粒～中粒の砂岩からなり、細粒砂岩や泥岩層の薄層あるいは円礫岩層をともなう。新鮮な部分は灰色～灰青色を呈して堅固な岩石であるが、風化が進むと黄褐色となり、脆くなることが多い。

c) 砂岩泥岩互層(alt)

砂岩と同様に、手取層群の主要な岩相をなし、手取層群分布域内で広範囲にわたり分布する。おもに連続性のよい中粒～細粒砂岩と泥岩の互層からな

り、何枚かの連続性の悪い礫岩層をとまなう。

d) 礫岩(cgl)

手取層群分布域内でおおよそ東西方向に帯状に広がって分布する。その基底部にあるものでは、円磨度の比較的高い巨礫～大礫からなる礫岩層で、砂岩層をはさむ。その礫種には船津花崗岩類にあたるものが多く含まれる。砂岩層や砂岩泥岩互層には含まれるものでは、垂角礫～垂円礫の中礫からなる礫岩層からなり、砂岩泥岩互層をはさむ。礫種は花崗岩類のほかに砂岩や泥岩も含まれるようになる。

(3) 火山性岩石

a) 流紋岩質岩石(R)

おもに図幅東端部の県境尾根上に分布し、それらの噴出火道にあたる部分もその南方にみられる。更新世前期に形成されたと考えられている奥飛驒火砕流堆積物にあたり、おもに紫蘇輝石角閃石黒雲母流紋岩質溶結凝灰岩からなる。溶結部は柱状節理をつくっているが、多孔質なため堅硬に固結しているわけではない。

この岩石は、同じ分類範疇に属する笠ヶ岳流紋岩類とは明らかに岩質や岩相ばかりでなく、形成時期が異なることから区別して扱うこととした。

b) 安山岩質岩石(溶結)(An1)

穂高安山岩類に属する岩相であり、東端部の県境付近に分布する。結晶片を多量に含む普通輝石紫蘇輝石安山岩質～デイサイト質の溶結凝灰岩からなる。均質塊状で堅硬であり、北アルプスの岩峰や岩壁を形成するが、規則的な柱状～板状節理を形成して、剥離崩壊をもたらすことが多い。

c) 安山岩質岩石(非溶結)(An2)

穂高安山岩類に属する岩相があり、溶結凝灰岩と同様に東縁部の県境付近に分布する。凝灰角礫岩、火山礫凝灰岩、安山岩質凝灰岩、不淘汰角礫岩などからなり、いろいろな岩相をとまなう。溶結凝灰岩にくらべてやや固結度

が低い、全体としては堅硬な岩石からなる。

d)安山岩質岩石(溶岩・岩脈)(An3)

手取層群中に調和的に貫いている岩体であり、手取層群分布域内に帯状ないしレンズ状に分布する。輝石安山岩質岩と無斑晶質デイサイト質岩にわけられるが、両者は区別しにくい場合が多い。強く変質作用を受けている。

e)流紋岩質岩石(溶結)(Ry1)

笠ヶ岳流紋岩類の主体をなす岩相であり、その北端部がわずかに本地域東部に分布する。石英、斜長石、カリ長石の結晶片を多量に含み、少量の苦鉄質鉱物をともなう流紋岩質～流紋デイサイト質の溶結凝灰岩からなる。全体に堅硬である。

f)流紋岩質岩石(非溶結)(Ry2)

笠ヶ岳流紋岩類のうち溶結凝灰岩層をのぞく火山性碎屑岩に相当し、流紋岩質岩石(溶結)と同様に本地域東部にわずかに分布する。おもに流紋岩質で非溶結の凝灰岩～火山礫凝灰岩からなり、美濃帯堆積岩類などから由来する岩片を多量に含み、きわめて岩相変化に富む。溶結凝灰岩にくらべてやや固結度が低い、全体としては堅硬な岩石からなる。

g)流紋岩質岩石(溶岩)(Ry3)

本地域東部にわずかに分布する。笠ヶ岳流紋岩を構成する岩石としてかなり特徴的に含まれる岩相であり、溶結凝灰岩層や非溶結凝灰岩層に挟まれて、比較的連続性の良い岩層として分布する。全体に斑晶の少ない溶岩からなり、自破碎部分もみられる。

(4) 深成岩

a)花崗岩(Gr)

いろいろな時代に形成された岩体を一括して表示してある。図幅の大部分の地域に広範囲に分布する岩体は「船津花崗岩類」であり、東縁部には世界

で最も若い花崗岩体とされる鮮新世の「滝谷花崗閃緑岩」や後期白亜紀～古第三紀の「奥丸沢花崗岩」が分布する。船津花崗岩類は黒雲母花崗岩、黒雲母角閃石花崗閃緑岩、角閃石黒雲母トーナル岩、細粒閃緑岩などのいろいろな岩相、岩質を示す。滝谷花崗閃緑岩はおもに角閃石黒雲母花崗閃緑岩から、奥丸沢花崗岩はおもに黒雲母花崗岩からそれぞれなる。

b)花崗斑岩(Gp)

槍ヶ岳流紋岩類に密接にともなわれる貫入岩類と手取層群中に貫いている岩体がある。前者はおもに黒雲母花崗斑岩として環状岩脈を形成して分布する。後者は黒雲母珪長岩として手取層群の地層面に沿って小規模に貫入している。いずれも堅硬な岩石として産する。

c)閃緑岩質岩石(Di)

本地域東部の県境尾根付近でいくつかの岩体として分布する。手取層群を貫き、それに接触変成作用を与えている。おもに斑状組織をもつ石英モンゾ閃緑岩からなる。

(5) 変成岩

(a)結晶片岩類(st)

図幅東端部の槍ヶ岳付近に分布するものは、飛驒外縁帯を構成する岩石であり、「槍ヶ岳結晶片岩」と呼ばれている。その西方にあたる双六谷付近に分布するものは「双六谷結晶片岩」と呼ばれているが、必ずしも飛驒外縁帯に属するとは考えられていない。いずれもおもに玄武岩質火山岩類を原岩とする苦鉄質片岩からなり、片状構造が形成されて脆弱性や剥離性をもつ。

b)片麻岩(Gn)

飛驒帯を構成する代表的な岩石であるが、船津花崗岩類に広く貫かれているため、図幅西部だけに限って分布する。黒雲母片麻岩、角閃石片麻岩、塩基性変深成岩、晶質石灰岩など、いろいろな変成岩類からなる。

3 資 料

下記の資料に詳しい。

- 1) 岐阜県恐竜化石学術調査団(1996) 岐阜県神岡町北ノ俣川流域における手取層群の地質。岐阜県博物館調査研究報告、17号、1-14。
- 2) 岐阜県恐竜化石学術調査団(1997) 岐阜県神岡町山之村地域における手取層群の地質。岐阜県博物館調査研究報告、18号、1-9。
- 3) 岐阜県恐竜化石学術調査団(1998) 岐阜県神岡町大多和地域における手取層群の地質。岐阜県博物館調査研究報告、19号、1-6。
- 4) 岐阜県恐竜化石学術調査団(1999) 岐阜県神岡町の手取層群から産出した恐竜の足跡。岐阜県博物館調査研究報告、20号、9-12。
- 5) 原山 智・竹内 誠・中野 俊・佐藤岱生・滝沢文教(1991) 檜ヶ岳地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)、地質調査所、190P。
- 6) 相馬恒夫・秋山紳一郎(1984) 飛騨変成帯中央部の地質構造と岩石の分布について。地質学雑誌、90巻、609-628。

Ⅲ 土 壤

農 地 土 壤

1 地域の概要

本地域は、岐阜県の飛騨北東部に位置し、神岡町・上宝村の北部及び宮川村の一部からなっており、東部は長野県、北部は富山県と接している。

農地は、主に神岡町の打保谷川と跡津川及びその支流の流域に分布している。土地利用状況は、大部分が山林、原野によって占められているため、耕地面積は少ない。

これら農地のうち、水田の大部分は地域内の河川沿いに分布し水稲が栽培されている。また、畑地等は山麓傾斜地等に分布しており冷涼な気候を生かした高冷地野菜や果樹が栽培されている。

農地土壌は地形、地勢が複雑で、4種類の土壌群が分布している。水田土壌はグライ土壌がほとんどであるが、他にグライ台地土壌、黄色土壌が散在している。畑地が黒ボク土壌が主体となっている。

2 土壌統群の分布

細粒強グライ土壌が最も多く分布し、礫質強グライ土壌、礫質グライ台地土壌や細粒黄色土壌が散在し、ほとんどが水田に利用されている。黒ボク土は表層多腐植質や厚層腐植質が分布し畑地用されている。

3 土壌群別細説

(1) 黒ボク土(03)

土性は壤質～粘質、腐植含有量は富む～頗る富む。母材は火山噴出物からできた土壌で、保肥力は高いが、磷酸や塩基類に乏しい。

(2) グライ台地土(08)

台地あるいは一部の山地や丘陵地に分布し、全層もしくは作土を除くほ

全層がグライ層からなるか表層及び（又は）次表層は灰色ないし灰褐色の土層からなり、下層がグライ層からなる土壌である。母材は一定せず、堆積様式も残積、洪積世堆積、崩積など多岐にわたる。分布地域の地形は台地上のほぼ平坦ないし緩傾斜面から山地丘陵地の急斜面までさまざまである。本土壤は還元条件下で生成し、主に棚田などの灌水に由来する。土性等はグライ土に似る。

(3) 黄色土(10)

土性は強粘質～壤質、腐植含有量は少ない。土色は黄色味が強く、丘陵地斜面に分布し、強酸性で塩基類に乏しく、保肥力、養分供給力等に欠陥がある。

(4) グライ土(14)

土性は強粘質・粘質・壤質・砂質で変化が大きい。土色は青灰色で、グライ層が現れる位置で細分化される。沖積地帯に分布し、地下水位は高く、排水は悪い。腐植含有量は概して少ない。

4 市町村別土壤総群面積一覧表

(1) 水田の部

| 市町村名 | 土壤群名 | 土壤統群名 | 土壤群番号 | 分布面積 (ha) | 備考 |
|------|----------|-----------|-------|-----------|---------------------------|
| 神岡町 | グライ台地土壤 | 礫質グライ台地土壤 | 0810 | 23 | 当面幅における分布面積は左記の分布面積の一部である |
| | 黄色土壤 | 細粒黄色土壤 | 1015 | 14 | |
| | グライ土壤 | 細粒強グライ土壤 | 1403 | 8 | |
| | | | 1404 | 153 | |
| | 礫質強グライ土壤 | 1414 | 29 | | |

(1) 畑地の部

| 市町村名 | 土壤群名 | 土壤統群名 | 土壤群番号 | 分布面積 (ha) | 備考 |
|------|-------|-----------|-------|-----------|---------------------------|
| 神岡町 | 黒ボク土壤 | 厚層腐植黒ボク土壤 | 0305 | 45 | 当面幅における分布面積は左記の分布面積の一部である |
| | | | 0326 | 56 | |
| | | | 0338 | 27 | |

5 資料

- (1) 岐阜県農業試験場(1971～76) 岐阜県吉城北部地域水田及び畑地土壤生産分級図
- (2) 岐阜県農業試験場(1979) 地力保全基本調査総合成績書
- (3) 農業技術研究所化学部土壤第3科(1983) 農耕地土壤の分類—土壤統の設定基準及び土壤統表(第2次案改訂版)
- (4) 土壤保全調査事業全国協議会(1986) 土壤断面をどう見るか
- (5) 福富敏雄(1991) 岐阜県の耕地土壤の実態と改善対策

林 地 土 壤

この図幅の範囲『有峰湖・檜ヶ岳』地域は、岐阜県の飛騨地方北東端に位置する。図幅の南東地域は長野県との、北部地域は富山県との県境であり、檜ヶ岳（標高3,180m）をはじめ、岐阜県内の飛騨山脈北部を構成する双六岳、三俣蓮華岳、黒部五郎岳、北ノ俣岳など標高2,500m以上の主稜線が連なる地域である。一方、図幅の北西部では高原川と宮川が合流し神通川となって北流しており、標高約200mと図幅内で最も標高が低い地域である。

地質を概観すると、図幅中央の跡津川沿いに跡津川断層が北東－南西方向に分布しており、北部には中生界の堆積岩、南部には花崗岩類、片麻岩類などが分布する。

この地域は約200mから3,200mと大きな標高差があり、それにともない植生も多様である。図幅北西部の標高の低い地域は、日本海側気候で積雪が多く寒冷なため、落葉広葉樹を主体とする山地帯となっている。約1,500m以下ではブナ、ミズナラなどの山地帯落葉広葉樹林、約2,500m以下ではシラビソ、オオシラビソなどの針葉樹を主体とする亜高山帯、約2,500m以上ではハイマツなどの高山帯の植物が生育している。

土壌の分布を概説する。高山帯では高山性岩屑土、岩石地の裸地と乾性ポドゾル化土壌が分布する。高層湿原やカールには泥炭土や泥炭ポドゾルが部分的に出現する。亜高山帯林には湿性ポドゾル化土壌、山地帯との境界域には暗色系褐色森林土壌が広く分布している。亜高山帯や低山帯の痩せた尾根上には、乾性ポドゾル化土壌がみられる。低山帯では、広く褐色森林土壌が分布している。また神岡町山之村地区などの平坦な古い地形面には、赤色系褐色森林土壌が小面積分布する。段丘堆積物の分布する地域などでは黒ボク土壌がみられる。亜高山帯、低山帯の痩せた尾根には、乾性ポドゾル化土壌が分布する。

本図幅に出現する土壌は、地形、地質と密接な関係を示し、表－1の土壌群一覧表に示したとおり7土壌群、15土壌統群に分けられる。

1. 岩石地

岩石地は、岩石が露出して裸地化している部分であり、カール壁、発達したV字谷の急峻な斜面などにみられる。土壌化はほとんど起こっていない。図幅東部では高山帯の斜面上部に多く分布し、図幅西部では高原川沿いに分布する。

2. 岩屑土

小さく割れた岩石が地表部を覆い、地表面には土壌が現れないのが岩屑土である。図幅東部の中部山岳地域に多く、主に森林限界以上の土壌化が進んでいない裸地状態の箇所と、高山帯のお花畑に分布する。周氷河地形の構造土が発達する高山性岩屑土、モレーンやカール壁下部の崖錐堆積物、あるいは急峻な谷の下部の崖錐堆積物などが相当する。

3. 未熟土

未熟土は、崩壊などにより表土が流出した地域、土石採取などによる切り土部分あるいは盛土部分、河川の氾濫原などで新しく土壌が堆積し、未だ土壌化が進んでいない土壌である。図幅内では神岡町の鉦山や鉦山跡地を中心に散在している。

4. 黒ボク土

黒ボク土は、火山灰を母材とするもので、傾斜の緩い谷部や段丘堆積物上に発達する。神岡町山之村地域、大多和地区、高原川沿いに小面積分布する。A層は明度1～2と黒色で腐植に富み土層は厚く、礫が少ない。A層下部は団粒構造、B層が塊状構造を示すBl_b型土壌、土性は埴壤土の場合が多い。植生はミズナラ、シラカンバ、ホオノキ、トチノキなどが上層を占める。土壌生産力は高い。

5. 褐色森林土

褐色森林土は、次の6土壌統群が標高1,900m以下の亜高山帯から山地帯にかけて広く分布する。

乾性褐色森林土壌は主に標高約1,500m以下の尾根部や斜面上部に、褐色森林土壌は標高約1,700m以下の斜面、谷に広く分布する。湿性褐色森林土壌は崩積土が谷に堆積した箇所に小面積分布する。また乾性赤色系褐色森林土壌は、開析の進んでいない地形面に分布する。暗色系褐色森林土壌は湿性ポドゾルの下部の標高およそ1,300～1,900mに分布しており、褐色森林土壌と湿性ポドゾル化土壌の中間的な土壌である。表層グライ化褐色森林土壌は、標高約1,200～1,500mの非常に緩い尾根に分布する、土壌表層にグライ斑が認められる褐色森林土壌である。

(1) 乾性褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌は、褐色森林土壌のうちB_A、B_B、B_Cに相当するもので、尾根部や斜面上部に分布する。図幅中には山田1統、日和田1統の2統が分布する。土壌生産力は低い。

植生は、上層木にアカマツ、ヒメコマツ、ミズナラ、ホオノキなど、下層にはネジキ、ナナカマド、タムシバ、ホツツジ、リョウブ、ヤマウルシなどが見られる。カラマツ植林地となることも多い。

① 山田1統

主に船津花崗岩類、片麻岩類を母材とし、図幅の西部から中央南部の尾根、斜面上部に分布する。受食のため未熟性の強い場所の土壌では、土性が砂壤土となることが多い。一方比較的土壌化の進んだものは、A層が壤土、B層が埴壤土となることが多い。尾根ではA層で粒状構造がよく発達したB_B型土壌、斜面上部では堅果状構造がよく発達したB_C型土壌となることが多い。土壌生産力は低い。

② 日和田1統

主に中生界の砂岩、泥岩、頁岩の堆積岩を母材とし、図幅の北西部および中央北部の尾根に分布する。母材が砂岩の場合には、土性は砂質壤土から壤土で、細粒状構造がよく発達する。また母材が泥岩、頁岩の場合は粒状構造が発達する機会が多い。土壌生産力は低い。

(2) 褐色森林土壌

褐色森林土壌は、谷沿いから山腹斜面、尾根上部にかけて分布するB₀(d)、B₀型土壌に相当するもので、広範にみられる。図幅中には山田2統、日和田2統の2統が分布している。土壌生産力が高い。なお標高の高い山地で暗色系褐色森林土壌に接する地域では、A₀層のF、H層がやや厚く、A層に多量の腐植を含むタイプもみられ、暗色系褐色森林土壌との中間型と考えられる。

植生は、上層木にミズナラ、コナラ、ケヤキ、トチノキなど、下層にはクマイザサ、チマキザサ、ユキツバキ、ハイイヌガヤ、アオキ、ノリウツギ、オオバクロモジ、オシダなどが見られる。スギあるいはヒノキ植林地となることも多い。

① 山田2統

主に船津花崗岩類、片麻岩類を母材とし、図幅の西部から中央南部の山地の斜面、谷部に広く分布する。土性は壤土からやや砂質傾向になる。A₀層は発達しないことが多く、A層は団粒状構造がよく発達する。A層、B層ともに石礫は少ない。

② 日和田2統

主に中生界の砂岩、泥岩、頁岩の堆積岩を母材とし、図幅の北西部および中央北部の山地の斜面、谷に分布する。標高がやや高く、積雪が多く寒冷な地域では、適潤性の土壌であってもA₀層が堆積することが多い。A層の土性は壤土となることが多い。A層は腐植に富み黒色が強く団粒構造がよく発達する。A層、B層ともに石礫は少ない。

(3) 湿性褐色森林土壌

湿性の褐色森林土壌で、B_E、B_F型土壌に相当する。B_E型土壌はA層に発達した団粒状構造をもち、スギ、カラマツの生産力が非常に高い。一方B層が壁状構造になるB_F型土壌では、過湿傾向が強くなるため、樹種ごとに生産力が大きく異なるが、B_E型土壌に比べ生産力が低い場合が多い。

植生は、上層木にオニグルミ、サワグルミ、カツラ、ハルニレ、ヤナギ類

など、下層にはイボタノキ、ノリウツギ、フキ、ツリフネソウ、ヒキオコシ、クサソテツ、オシダなどが見られる。

図幅中央部を中心に小面積が散在する。

(4) 乾性赤色系褐色森林土壌

図幅中では、森茂統が分布する。

① 森茂統

主に花崗岩類、片麻岩類を母材とし、尾根、斜面上部の開析の進んでいない地形面に分布する。乾性型の rB_A 、 rB_B 、 rB_C 型土壌に相当し、A層、B層で粒状構造、堅果状構造が発達する。A層の層厚は薄く、B層およびC層の色調はやや赤みの強い明褐色を呈する。赤色風化の影響を受け、赤味の強い母材から生成されたと考えられる。土壌生産力は、ふつうの褐色森林土壌群に比べて高くない。

植生は、上層木にアカマツ、ヒメコマツ、コナラなど、下層にはクマイザサ、ウリカエデ、ナナカマド、ガマズミ、オオカメノキ、リョウブ、ヤマウルシ、ツノハシバミなどが見られる。

図幅上では、神岡町山之村地区に分布するものについて記載した。

(5) 暗色系褐色森林土壌

標高の高い地域に認められる褐色森林土壌で、 dB_D 、 $dB_D(d)$ 型土壌の分布が多い。非常に厚い黒色脂質のH層あるいはH-A層が認められる。続くA層も腐植に富み、上部には団粒状構造が認められる。土地生産力は高くない。

植生は、コメツガ、シラビソ、ブナ、ミズナラ、コシアブラ、ダケカンバ、コミネカエデ、オオカメノキ、ヒメアオキ、ゴゼンタチバナなどがみられる。

図幅中では、山地帯と亜高山帯の境界域、湿性ポドゾル化土壌の下部に分布する。

(6) 表層グライ化褐色森林土壌

鉍質土層の上部にグライ斑が認められる褐色森林土壌である。傾斜の緩い尾根、斜面のところに分布し、強粘性の土壌で土壌表層の透水性が悪いためグライ斑が生成される。土壌生産力は低い。ブナ、ミズナラ林などの天然広葉樹林、カラマツ植林地となっている。

図幅の北部に小面積分布する。

6. ポドゾル

ポドゾルは寒冷地域に出現し、 A_0 層が発達し、腐植から発生した有機酸により土壌表層で溶脱、集積が認められる土壌である。図幅内では高山帯、亜高山帯地域に広く分布し、部分的には山地帯上部もみられる。乾性ポドゾル化土壌、湿性ポドゾル化土壌に区分され、湿性ポドゾル化土壌は溶脱および集積の形態から鉄型と腐植型に細分される。

(1) 乾性ポドゾル化土壌

乾性ポドゾル化土壌は、ポドゾル化の程度により P_{D1} 、 P_{D2} 、 P_{D3} 型土壌に分けられる。山頂、尾根筋、凸斜面上部など乾燥の影響を受けやすい場所に生成される。

高山帯のハイマツ林下には、未熟な乾性ポドゾル化土壌がみられる。また亜高山帯や山地帯上部の尖鋭な尾根など特に強い乾燥の影響をうける場所に点状または細い線状に分布する。 A_0 層が厚く発達し、全土層厚が薄く、石礫が多い。植生は上層にネズコ、ヒメコマツ、ツガ類、モミ類等の針葉樹が優占する 경우가多く、下層にはオオカメノキ、ハウチワカエデ、オガラバナなどがみられる。

図幅の東部、中央部を中心に分布する。

(2) 湿性鉄型ポドゾル化土壌

$P_{W(1)}$ 、 $P_{W(2)}$ 、 $P_{W(3)}$ 型土壌に相当する。主に中生界の砂岩、泥岩、頁岩の堆積岩を母材とし、図幅東北部の高山帯、亜高山帯に分布する。H層が厚く発達し、腐植に富むA層またはH-A層をもつ。B層が壁状構造となることが

多く透水性が不良であるため、腐植の浸透が悪い。B層に斑鉄や鉄盤層を形成する。寒冷地の平坦地あるいは緩い傾斜地の重粘、ち密な土壤母材のところに形成され、土質全体もち密である。オオシラビソ、シラビソ、トウヒ、ネズコ、コメツガ、ダケカンバなどの天然林下に分布が多い。土壤生産力は低い。

(3) 湿性腐植型ポドゾル化土壤

$P_{w(h)I}$ 、 $P_{w(h)II}$ 、 $P_{w(h)III}$ 型土壤に相当する。主に船津花崗岩類、片麻岩類を母材とし、図幅東部の高山帯、亜高山帯に分布する。土層全体が多腐植で暗色味の強い土壤である。鉄型に比べて腐植が土層中によく浸透し、土層は必ずしもち密ではない。厚いA層をもち、寒冷地の傾斜地に広く形成される。オオシラビソ、シラビソ、トウヒ、ネズコ、コメツガ、ダケカンバ、ブナなどの天然林下に分布が多い。土壤生産力は低い。

7. 泥炭土

特に標高の高い地域の沼沢地など、常に滞水するところでは、寒冷な気候と過湿状態から植物遺体の分解が進まないため、これらが堆積して泥炭層が形成される。この泥炭層が特に厚く発達した土壤が泥炭土、比較的厚く堆積した泥炭起源の腐植土層にポドゾル化がみられる土壤が泥炭ポドゾルである。

(1) 泥炭土

土層上部に泥炭層が厚く堆積した土壤で、山地の谷部に分布する。図幅中では水ノ平の湿地周辺に小面積分布する。ヤハズハンノキ、ヤマドリゼンマイ、コバイケイソウ、アブラガヤ、ミズバショウ、リュウキンカ、オオバギボウシ、ニッコウキスゲなどが生育する。

(2) 泥炭ポドゾル

寺地山から桑崎山、北ノ俣岳にかけての緩い傾斜地、双六池周辺、秩父平に分布する。泥炭起源の腐植土層が弱い溶脱状態を呈する。鉍質土層の上部に橙色の明瞭な集積層をもつ。高層湿原であり、イワイチョウ、イワシヨウ

ブ、ニッコウキスゲ、ミズバショウ、シラタマノキ、クロマメノキ、コイワカガミ、ミズゴケ類などが生育する。

参考文献

- (1) 土じょう部（1976）森林土壌の分類（1975）. 林業試験場研究報告280 : 1-28.
- (2) 日本の地質『中部地方Ⅰ』編集委員会（1988）日本の地質 5 , 中部地方Ⅱ. 310pp, 共立出版株式会社, 東京.
- (3) 山家富美子・丸山明雄・大貫靖浩・八木久義（1990）岐阜県高山市周辺の赤味の強い2土壌について. 日本林学会大会発表論文集101 : 261-262.

表一 1 土壤統一覽表

| 土 壤 群 | 土 壤 統 群 | 土 壤 統 | 母 材 | 地 形 |
|-------|------------------|-------------------|----------------------|--------------------|
| 岩石地 | 岩石地 | — | — | — |
| 岩屑土 | 岩屑性土壤 | — | — | — |
| 未熟土 | 未熟土壤 | — | — | — |
| 黒ボク土 | 黒ボク土壤 | — | — | 緩傾斜地 |
| 褐色森林土 | 乾性 褐色森林土壤 | 山田 1 統 日和田 1 統 | 花崗岩類・片麻岩類 中生界堆積岩類 | 山地尾根・斜面 上部・山地尾根 |
| | 褐色森林土壤 | 山田 2 統 日和田 2 統 | 花崗岩類・片麻岩類 中生界堆積岩類 | 山地斜面・谷 山地斜面・谷 |
| | 湿性 褐色森林土壤 | — | — | 谷 |
| | 乾性赤色系 褐色森林土壤 | 森茂統 | 花崗岩類、片麻岩類 | 尾根・斜面上部 |
| | 暗色系 褐色森林土壤 | — | — | 標高の高い山地 斜面 |
| | 表層グライ化 褐色森林土壤 | — | — | |
| ポドゾル | 乾性 ポドゾル化土壤 | — | — | 山地の痩せ尾根 |
| | 湿性鉄型 ポドゾル化土壤 | — | — | 山地の緩い尾根・ 緩斜面 |
| | 湿性腐植型 ポドゾル化土壤 | — | — | 山地の尾根・斜 面 |
| 泥炭土 | 泥炭土 | — | — | — |
| | 泥炭ポドゾル | — | — | — |

IV 土地利用現況

1 農地

本図幅の左部を高原川が北流し、跡津川、打保谷川がそれに合流している。また、金木戸川が図幅中央下部より南方向に流下している。

本地域では農地のまとまった分布は少ない。また、地形的な制約もあり、ほとんどの農地が河川に沿って分布している。

この地域の農地では、夏季の冷涼な気候を利用した高冷地野菜（ほうれんそう、トマト）の生産が盛んであり、農業粗生産額に占める野菜の構成比率が高い。また、畜産業も熱心に取り組み、特に肉用牛の繁殖、肥育が盛んである。

2 林地

本図幅内の全ての町村において、林地の占める面積率は県平均林野率の81.8%を超えており、94.8%～96.0%と非常に高い割合となっている。

所有形態別にながめると、地域内の3町村では民有林の比率が59.7%となり、県平均の79.1%より低い。なかでも上宝村では国有林の比率が56.2%と高い割合を占めている。

林地の約3割は人工林で構成されている。主要樹種はスギ、ヒノキ、カラマツなどである。天然林のほとんどは広葉樹で占められ、こうした豊かな森林資源を背景に木工、家具製造業が主要な地場産業として発達してきた。

本図幅内では、近年において県内に多く認められるゴルフ場やスキー場などの開発が比較的少なく、林業目的以外に目立った土地利用は見られない。

3 市街地・集落等

本図幅の最西部を高原川と神岡鉄道が並行しており、図幅中央部には跡津川、打保谷川が流れている。

集落の大半は、これら鉄道や川に沿って点在している。

2002年3月

印刷発行

岐阜県土地分類基本調査

〔有峰湖〕〔槍ヶ岳〕

発行 岐阜県地域計画局土地対策室

〒500-8570 岐阜市藪田南2-1-1

電話 (058) 272-1111

印刷 日新印刷株式会社

岐阜市藏前2丁目3番1号